

ヴェトナム史話

駒井義明



が、これはカントン地方が珠江流域を中心として多くの河川が平らな陸地を流れてをり、従って橋梁が多数もうけられていたという意味であろう。

この始皇帝の征伐の結果、南越は中国の領土となり、郡県制度がしかれて今のカントンは南海郡がおかれ、その他広西省方面にも二郡がおかれたが、いわゆる嶺南三郡の設置である。そしてカントンが中国南部の貿易港としての基礎を開いたのは実にこの時である。その後、ポルトガルのマカオ或はイギリスのホンコンが開かれるまで、永年にわたってこのカントンは中国の外国貿易の主要港となり、特に唐宋時代にはアラビア貿易が大いに発展しカンフー（広府すなわち広州府の略）とよばれ、ジャンフー（泉府すなわち泉州）・カントゥー（江都すなわち揚州）などと共に海外にその名を知られた。そのため外国人の渡来が多かったカンフーには蕃坊といって外国人の居留地が設けられ、ここにはアラビア人・ペルシア人などいわゆるタージ（大食人）の居住するものが多く、カントン港は大いに賑わった。市舶司という海関（海の税関）がおかれるようになったのもそのためである。

1
昨今ヴェトナム問題が世界的のものとなり毎日の新聞の紙面などを賑わしているのに、以前少し調べたことのあるヴェトナムの歴史について述べてみたい。

中国の広東・広西の地方が公式に中国領土に編入されたのは秦の始皇帝の時である。当時この地方は南越とよばれて漢人とは人種を異にした人々である越人が住居した所であるが、中国が始皇帝によって統一されると漢人も南嶺（両広岳陵）を越えて徐々に移住していったと考えられる。

この頃、北方の蒙古方面では戦国時代から

ひき続いてモンゴル系の匈奴民族の勢力が大いにさかんであつたので、始皇帝が戦国以来の長城を修築していわゆる万里長城として、匈奴の侵入を防いだことは有名な話である。しかし、それでも安心できなかった始皇帝は度々軍隊を派遣して匈奴征伐を行ったが、紀元前二一五年には勇将蒙恬に三十万の大軍を授けて大々的の討伐を行った。

始皇帝が当時の習慣として犯罪人を中心とした軍隊を遣わして別に南方の南越を伐つたのはこの匈奴大討伐の翌年のことであつたがこの南越討伐には南方に中国領土を拡張しようとする彼の意図が含まれていたようである。この南越地方は当時陸梁の地といわれた

さて始皇帝が死ぬと（西紀前二一〇年）従来の彼の王政に反撥して中国各地に反乱が起ったが、南越もカントンにいた南海郡の中国官吏を中心として独立した。この独立国家の成立には越人の民族意識も大いに反映したと思われる。そしてこれが嶺南地方における独立国家のはじめである。

この独立国家の南越はその後八十年あまり続いたが、征服欲に燃えた前漢の英主武帝のために滅ばされて、南越は再び中国の領土となつてしまつた。武帝はこれよりさき、南越討伐以前に張騫を西域に遣わして西域交通路といわれる絹の路を開き、又この後現在の北鮮の平壤を都とした漢人の植民国家である衛氏朝鮮を滅ぼして楽浪郡などの朝鮮四郡をおいたことなどで有名である。この楽浪郡とわが国とがこの後深い関係をもちよつたことには此に述べるまでもないことである。

武帝による南越討伐は紀元前一二一年——一年にわたつて大々的に行われ、その結果南越は征服され、南越王家の人々はトンキン方面に逃れたといわれるが、南越は以前から

トンキン方面と関係が深かつたようである。

武帝は戦勝の結果トンキン地方からヴェトナム方面にまで中国の領土を拡め、北は海南島から最南は南ヴェトナムのユエまで中国の郡県制度がしかれたが、ユエには南越九郡中の最南端の日南郡がおかれた。日南郡はこの後中国南端の貿易港として栄え、海外にその名を知られたが、西紀一四〇年頃を中心として生存したエジプトのアレキサンドリアの地理学者として有名なクラウディウス・プトレメウスの地理書に見えるカチガラはすなわちこの日南郡といわれる。又ローマ皇帝の五賢帝の一人として知られるマルクス・アウレリウス・アントニヌスの使者と称するものが日南郡にきて中国に朝貢した話も有名である。この皇帝は中国の史書に大秦王安敦と見え、時に西紀一六六年で後漢の桓帝の治世であつた。なお以上の九郡中の交趾郡は現在の北ヴェトナムの首都ハイノにおかれた。

以上の様に武帝の征服の結果今日の両広地方から南はヴェトナムを含めて中国領土となつたが、現地の原住民の漢人支配に対する反抗はこの後も次第に強まり、その後百五十年あまりを経た後漢の光武帝の時、遂にトンキン

ンのハノイ地方すなわち交趾郡の女酋姉妹は近隣の種々の原住民を誘つて大反乱をおこし武帝以来この地方にあつた中国の郡県は悉く彼女らによつて攻略されてしまつた。そこで光武帝は時の名將馬援を遣はしてこの大反乱を鎮定したが、これに前後五年を費したほどで（西紀四〇—四四）、これによつてこの反乱の規模がいかに大きかつたかを知ることができるが、馬援もその功によつて新息侯という爵位をえたほどである。なお中国側の伝説によるとこの征伐の後、馬援が警備のため現地に残留せしめた兵士の子孫が現在のマレー人の先祖となつたのであるという。

馬援は又現在でも宝物としてあつかわれているこの地方の名物である銅鼓を鑄つぷして銅柱を造り征服の極南の境界の標識としてこれを建てたといわれるが、銅柱のたてられた場所は現在の南ヴェトナムの広義付近と考えられる。

3

馬援の大討伐によつて現地人の反抗は一応おさえられたが、それから六十年あまりたった和帝の頃から反抗は再び起り、その後引続

いた度々の反乱の結果、後漢末には又も大反乱が起った。これは日南郡下の象林県の下級役人で原住民と考えられる区連がおこしたもので、この区連は遂に独立国家の建設に成功した。これが中国でいう林邑国である。林邑の都は区連が反乱を起した日南郡象林県におかれ典冲シヤウチュウといわれたが、ここは先に馬援が銅柱を建てたところである。そして林邑は唐代以後環王更に占城シヤンシヤウといわれた。

さて林邑の人種は支配者である林邑人はその本拠をマレー半島にもったプリミティブ・マレーのチャム人であり、一般の人々は土着のモン・クメールすなわちモン・アンナミットといわれる。チャム人の容貌は中国の記録によるとわし鼻で頭髮はちぢれ皮膚は暗黒色といわれるが、被支配者のモン人或はクメール人は現在のヴェトナム人の系統と考えられる。なおカンボジア人はクメール人である。又、チャム人はわれわれ日本人に非常によく似てをり、チャム語も日本語によく似ていて日本人の先祖の一部は此辺からわが国に渡来したとするヨーロッパの学者もいる。

さて、この林邑は後漢末の建国から三国・両晋・南北朝・隋を経て唐の中頃の肅宗皇帝

の至徳年間（西紀七五六—七）まで続いたがその間約五百数十年で、以後は一時環王シヤンとして占城と称した。なお林邑に関連して想起されるのは奈良時代にわが国の寺院で行われた有名な林邑楽（臨邑楽）であるが、これは林邑本来のものでなく実質的には天竺楽（印度楽）とよばれるべきもので、わが国が林邑の所在を天竺と考えたための誤解といわれる。然しチャンパの名称は北インドのチャンパ国の人々が東方に渡来して原住民を指導してたてたので起ったともいわれる。

さて前掲の文章で林邑の名称は唐の至徳年間までで、以後は環王さらに占城といわれると述べたが、これは林邑が外征好きの隋の煬帝の時に將軍劉方の討伐をうけて中国の郡県となり、従つて林邑王が都を別にさだめ、この都の名をとつて国号を環王と改めたからであるといわれる。なお都となった環王の所在は今の南ヴェトナムの帰仁クイニンと考えられる。然し環王というのは中国側の命名の様で、林邑は間もなく王城を現在の平定ヘンテイにさだめ、これを占城すなわち占人の城シヤンシヤウだったので、以後林邑・環王に代つて占城の国号が行われるようになった。

4

さて唐代に入ると中国は外地支配のために六都護府を設けたが、その一つは今のハノイにおかれこれを安南都護府と称したが、これが安南という名称のおこりといわれる。安南について思ひ出されるのは安倍仲麻呂であるが彼は西紀七十六年二十歳で留学生として遣唐使一行に加つて唐に渡り玄宗に仕えて諸官に歴任し、その後遣唐大使藤原清河とともに帰朝しようとして明州から船出したが、海上風波にあつて吹きもどされ安南に漂着した。そこで仲麻呂は再び清河とともに唐に帰り、肅宗、代宗に仕え、名も中国風に朝衡と改め安南都護に任命されたという。

唐の衰亡とともに安南（ヴェトナム）人は過去の永い中国支配を脱して独立を試みようとする気運が濃厚となり結局その独立を達成した。それが西紀一〇一〇年の李公蘊リコンによる李朝の成立であるが、それまでには幾度か土豪の替立が行われている。彼は都をハノイに定めて国家の基礎を固め、次で国号を大越と号し、以後歴代の王は或はチャンパを征し或は宋の南征軍を斥けて強盛を極めたが、その

後衰弱して西紀一二二五年には遂に滅んだ。

李朝に代った陳朝は李朝の外戚の陳守度が建設したものである。その初期には三度にわたる元朝の蒙古軍の來攻を退け、一方チャンパをも攻めて南北において大いに活躍した。しかしその後チャンパ征伐の失敗があり、西紀一四〇〇年には権臣黎季犛のために国をうばわれた。

しかし、たまたま明の成祖永樂帝はその領土拡大欲にかられて大遠征軍をおこし、結局安南を占領してここに中国の郡県制度をしき交州布政使司がハノイにいてこれを支配した。(西紀一四一四)

然し間もなく安南には黎利が現われて明軍を撃退し大越国を建てハノイに都し黎朝の第一歩を開き、黎利の孫の時チャンバを亡し(西紀一四七〇)ラオスをあわせ約百年間栄えたが、これは安南(ヴェトナム)人の独立心の根強さを示したものである。しかし十六世紀の始め黎朝は権臣莫登庸に奪われ約六十年その支配は中絶されたが、再び黎朝は復活した。その後黎朝は二権臣によって国政を左右され、その一人の阮氏は順化により国を広南と号し、他の一人の鄭氏はハノイにいて黎氏

を擁して大越と称し共に権力を振った。

然し西山の一商人から身を起した阮文岳が突如風雲に乗じて現われ、先ずサイゴンを陥れてユエから移っていた阮氏を仆し、次で北上してハノイの鄭氏をも降した。そこで黎朝の皇帝は清朝に逃れてここに黎朝は滅亡した。時に西紀一七九三年である。

この様にして一時西山朝の成立を見たが、微に余命を保っていた阮氏の一族阮福映はフランスの宣教師ビニョーの後援をえて西山朝を倒し、北はトンキンから南はコウチ・シナに至る安南(ヴェトナム)全土を統一し(西紀一八〇二)ユエに都して清朝から越南王に封ぜられた。この様にして越南は既に建国当初からフランスの背景をもったが、時のフランス皇帝はナポレオン三世で後に仏領インド・シナの成立する遠因となった。

その後、安南は西紀一八八六年保護国、カンボジアは一八六三年保護国、コウチ・シナは一八六三年属領、トンキンは一八八四年属領、ラオスは二八九三年保護国となつて仏領インド・シナが成立し、その首都は一九〇二年以前はサイゴンに、以後はハノイにおかれた。このようにしてインド・シナはフランス領

となり、此の状態は第二次大戦まで続いた。

しかしフランス支配に対するヴェトナム人の民族解放運動は早くから起り、胡志明はヴェトナム共産党(ヴェトコン)越共を創立し(一九四九年)、太平洋戦争にはヴェトミン(越盟)を組織して日本に対し地下運動を続け、戦後ついにヴェトナム民主共和国が成立した(一九五五年)。しかし一九四六―五四年にわたつて此の国と南のフランス援助によるヴェトナム共和国(バオダイ政権)の間にインド・シナ戦争が起つたが一九五四年七月のジュネーブ会議によつて休戦協定が成立しヴェトナムは一応北緯一七度附近で南北に分れることになった。これが現在の状況である。なおヴェトナムでは第二次大戦後フランスが阮朝最後の保大帝をヴェトナム国首席としたが、バオダイ帝は一九五五年ヴェトナム共和国の成立によつて退位した。

(高校教諭・社会)